

意味論的内在主義と外在主義的直観の調停

指示の理論的位置づけを再考する

仲宗根勝仁(大阪大学博士後期課程)

ソール・クリプキによる1970年の講義及び1972年の論文「名指しと必然性」、ヒラリー・パトナムの1975年の論文『意味』の意味以降、言葉の意味がどこにあるのか、何によって決定されるのかという問題が言語哲学において盛んに議論されてきた。言葉の意味が個々の人間の脳の機能や心的状態によって決定されるとする立場は「意味論的内在主義(semantic internalism)」と呼ばれ、(少なくともいくつかのタイプの)言葉の意味の決定には実在世界や環境という外在的要因が不可欠であるとする立場は「意味論的外在主義(semantics externalism)」と呼ばれる。少なくとも1990年初頭まで、意味論的内在主義及び意味論的外在主義の論争は、ゴットロープ・フレゲ以来の言語哲学的伝統を踏襲し、指示(Bedeutung, reference)がどのように決定されるのかについての論争とみなされてきた。名前の指示対象が名前に関連付けられる記述によって決定されるというバートランド・ラッセルやジョン・サールの初期の見解を批判したクリプキは、「指示の因果・歴史説」と呼ばれる、名前の指示対象が命名儀式によって与えられ、その名前を言語コミュニティが延々と受け継いできたその因果的連鎖ゆえに名前の指示対象は決定されているという見解(見取り図)を提案した。クリプキの批判は、名前の意味を理解するには名前に関連付けられる記述を個々の話者が知っているだけで十分であるという意味の個人主義への批判でもあり、名前によって指示されているもの(referent)が何であるかを問題にしない当時の意味論の方法への攻撃でもあった。「言葉は頭の中になく」というセンセーショナルな触込みで意味論的外在主義を擁護したパトナムは、双子地球の思考実験を考案し、「水」という語を使用している際の心的状態が全く同じである双子が外在的環境に応じて異なる指示対象(地球ではH₂O、双子地球ではより複雑な組成を省略したXYZ)を「水」によって指示しようと論じた。結果としてパトナムは、現在ではタイラー・バージの反個人主義の見解とともに社会的外在主義(social externalism)とも呼ばれている、(意外なほど)多くの語の指示対象(外延)が一般的話者によって決定されるのではなく専門家などの特定の集団によって決定されているとする言語の社会的分業(division of linguistic labor)を打ち出した。クリプキやパトナムから始まる意味論的外在主義は言語哲学だけでなく心の哲学にも浸透し、現在の言語哲学のパラダイムとなっている。

その一方で、サールによる内在主義の積極的擁護もむなしく言語哲学において軽視されつづけてきた意味論的内在主義は、特に1990年代後半以降、パトナムの双子地球の思考実験の教訓を捉えなおし、意味の二つの側面を内包的枠組みによって説明しようと試みたデイヴィッド・チャーマーズや、過度に哲学的な意味論的概念を批判しつつ言語学的研究手法に則った意味論の構築を図るノーム・チョムスキーとその後継者らによって擁護されてきた。意味を個人の認知的行為との関連で捉えなおすことを試みたチャーマーズは、パトナムが提示した双子地球の論証から得べき教訓は、心的状態が決定する内容と環境などの外在的要因によって決定される内容が異なりうるという点であり、外在的に決定されるアポステリオリな意味(「二次内包(secondary intension)」や「仮定法的内包(subjunctive intension)」と呼ばれる)と個人の心的状態によって決定されるアプリオリな意味(「一次内

包(primary intension)」や「認知的内包(epistemic intension)」と呼ばれる)を区別することで双子地球の思考実験の意味論的説明を提案した。チョムスキーは、言語的機構(linguistic faculty)なる人間の心的機能の一種を理論的に導入し、言語機構によって可能となる推論や合成性などの言語内在的概念を人間の心/脳に内在的に備わる言語的機能として説明するのが意味論の役割だと主張した。彼は、クリプキやパトナムの議論が哲学的直観に根差しており経験的裏付けがされていないことを指摘するとともに、指示は言語の使用のレベルで起こることであり意味論のレベルで説明する必要がないと指摘し、さらに、意味論が科学的に研究されるべきだという自然主義的立場をとる限り外在主義的意味論は見込みがないと断じた。チョムスキー派の言語哲学者であり意味の理論を理解の理論として説明しようと試みるポール・ピエトロスキーは、意味と真理の癒着が意味の理論の研究を妨げていると考え、チョムスキーと同様、推論や含意関係、文の多義性とその除去、解釈のメカニズムなどの解明が意味論の役割であり、クリプキやパトナムが明らかにした直観は意味論ではない別の理論を支持する直観だろうと論じた。

1990年代末から現在までの間に、言語学的研究の言語哲学における受容と相まって、意味論的内在主義と意味論的外在主義の論争が細分化され、「意味が何によって決定されるか」という古典的な問いについての論争から、指示の決定についての内在主義/外在主義や意味そのものの理論的位置づけの問題、意味と対象や意味と真理・実在のような「意味論的關係」と呼ばれてきた哲学的概念をめぐる論争、コミュニケーションの成功と指示の関係についてなど様々な議論に派生している。

本発表では、意味論的内在主義と意味論的外在主義の論争を整理しつつ、自然主義的観点からチョムスキーとその後継者たちが推し進める意味論的内在主義の擁護を試みる。本発表は次のような構成になる。まず、近年ヒュー・プライスが定式化した二つの自然主義的立場、客体自然主義(object naturalism)と主体自然主義(subject naturalism)を紹介し、主体自然主義の立場とチョムスキーらの意味論的内在主義との親和性を示す。次に、意味論的外在主義と意味論的内在主義の論争は、言葉と世界の関係(word-world relation)と意味の社会的性格という外在主義的直観を言語哲学的にどう扱うのかということにその争点があることを示し、そのうえで外在主義的直観を意味論的な仕方では担保したいという考えは主体自然主義の観点からは擁護されない(する必要がない)と指摘する。最後に、指示は意味論とは独立に価値のある語用論的概念装置であり、後意味論(post-semantics)に位置づけるべき哲学的概念だと主張する。チョムスキーは指示を消去可能なものとしては扱わず、言語の使用という言語実践の段階で現れると主張し、ピエトロスキーは2008年の論文「最小主義的意味、内在主義的解釈」で、真理条件の意味論が意味論の記述すべき言語機構と直交する別の認知的システムの理論を反映しているという見解を控えめながら示唆している。推論や合成性などの言語内在的概念と「言葉と世界の対応」という表象的性格を一緒くたに意味論に詰め込むのではなく、意味と指示を異なる仕方、異なる認知的機構として実装することが有用なのではないか、というのが本発表を通しての主張である。